

# 批評の行方

—W. Iser と J. H. Miller—

有 為 楠 泉

たとえば文学にはありえても、文学批評にイズム（主義）はありうるだろうか。なぜなら、イズムを表現するための批評という図式は、そもそも、作品を読むという批評の行為の発想としては逆転しているからである。しかし、文学批評に何らかの傾向を、しかも、往々にして顕著な理論的傾向を見い出すことはある。それを一般に、批評のイズムといった呼び方で表しているという方が適当であろう。たとえば、impressionism（印象主義）と呼ばれる素朴な批評の型。作品の客観的あるいは相対的把握をあらわすというよりは、作品から得られる直感的印象を大切にする読み方に与えられるこの名称は、主義としての一つの批評形式というよりは、作品への素朴な感応という文学鑑賞の原点を言い表したものと見ることができよう。それなら、1960年代半ばに興って、言語学・文化人類学のみならず、文化に関わる諸々の分野にまたたく間に浸透し、文学批評の世界をも席卷して流行を生み出した structuralism（構造主義）の場合はどうか。ある文化現象は、さまざまな要素が相互に有機的に連鎖状に層をなして組み立てられているという発想を基盤にしたこの理論によれば、文学作品においては、作品が語るのではなく、言語によって組み立てられた構造そのものが、作者を媒介にして語りかけてくるといった考え方を、その批評の原点に据える<sup>(1)</sup>。しかし、これとて、New Criticism 以降の文学批評の流れ、あるいは特に、Northrop Frye を頂点とした、archetype や mythos を作品に読み取ろうとする原型批評的活動を思い並べるとき、構造主義文学批評を

新しいイズムの実践と取るよりは、前者の流れに連らなる文学批評のもうひとつのパターンとして見る方が、文学史的にもおさまりがよい。

それなら、構造主義以降の文学批評の傾向はいかなるものであるか。筆者のみならず、多くの文学研究者の関心の一つが、この問題をめぐってあると言っても過言ではあるまい。しかし、批評はあくまでも作品あつてのことである。そして、最近の批評の傾向を知ることは、文学作品を理解する助けになるとは言いえても、作品の十全な理解とイコールにはつながらない。さらに増して、構造主義以降の批評活動が、極めて複雑多岐に渡り、かつそれぞれが先鋭な色合いを見せていることは、周知の事実である。従って、ここ十数年間の批評を網羅してみることは、不可能であると同時に、必らずしも、読者である我々と文学作品の間の距離を埋めてくれるとは断言できない。作品に対峙するのは読者一人一人であり、その意味では、読者の数だけの批評が存在するとも考えられる。

とはいうものの、諸々の批評の中の、ある種の傾向を知ることは、作品を解釈との関連性において読むというもう一つの読書の楽しさを提供してくれる。そこで筆者は、次の二書を中心に、最近の批評の動向の一端を垣間見ると同時に、批評と文学の接点を再度確認しようと考えたのである。一つは、Wolfgang Iser の *The Act of Reading* (1978)、もう一つは、J. Hillis Miller の *Fiction and Repetition* (1982)、もちろん、傾向として、前者は Reader-Response Criticism、後者は Deconstruction を背景に備えている。なお、読書会形式でこの二書を筆者とともに読み進み、言語学者としての立場から数々の提言をお寄せくださった公平珠躬教授には、深く感謝の意を表するものである。読書会での読み方としては、各章もしくは数章毎に、批評家と、とりあげられている作品と、readerたる我々の、相対的位置を確認しつつ読み進むことに努力した。ただし、本稿における問題整理及び問題提起は、会での議論からは大幅に逸脱しており、無論その点は全て筆者ひとりの責任であることを最初にことわって

おきたい。

まず、この二書の趣旨あるいは論点をおさえておく必要がある。出版年代の点では逆になるが、Miller の *Fiction and Repetition* から見ていった<sup>(2)</sup>。Miller は、文学作品の中に存在する様々な反復に着眼し、個々の作品理解のための鍵とする。Miller によれば、反復には二つの型がある。一つはいわゆるミメシス（模倣）に基いた、モデルとコピーという「プラトンの」反復であり、もう一つは、ファンタスム（幻想）に依る、一見したところでは同一反復であるが、実は差異が対応されてできているにすぎない「ニーチェ的」反復である。殆んど全ての文学作品には、この二つの反復の型が縦横に潜んでいるのであり、しかもこの二つの型は論理的には両立しないはずであって、互いに影のように相携えて存在する。Miller は、とりあげた七つの小説すべてについて、この二つの型の反復が、両方とも正しいように、また同時に正しくないように思われることを証明していく。文学あるいは哲学のテキストの中にあるこうした異種混合性 (heterogeneity) の想定（つまり、either/or 理論の否定）を、彼は Deconstruction と呼ばれる批評の型の基本原理と捉えると同時に、とりあげた七つの小説以外の作品にも同様の図式をあてはめて解釈することが可能であると主張する。そして七つの小説におけるこうした様々な反復の効果を、各々の作品のテーマ、雰囲気、に、手際よく蘇やかに結びつけていく。各章の副題にその蘇やかさが見てとれる。(LORD JIM—Repetition as Subversion of Organic Form, WUTHERING HEIGHTS—Repetition and the “Uncanny”, HENRY ESMOND—Repetition and Irony, TESS OF D’URBERVILLES—Repetition as Immanent Design, THE WELL-BELOVED—The Compulsion to Stop Repeating, MRS. DALLOWAY—Repetition as the Raising of the Dead, BETWEEN THE ACTS—Repetition as Extrapolation) 彼は、多くの文学作品には、

一貫性と統一性という伝統的基準では説明不可能と思われることがたくさんあるとし、この書が、この説明不可能性の正体を見抜き、説明する試みであると述べる。

Much in many works of literature seems unaccountable by traditional standards of coherence and unity. This book attempts to identify and to account for one form of this unaccountability.

(p. 19)

ところで、注目すべき点は、Miller が、自分の批評スタイルを、基本的に、ある作品の全体性 (totality) を説明したいと考える点で、ニュークリティシズムの後継者だとしていることである。そして彼は、ニュークリティシズムの最大の長所が、作品のデテールの重要性を指摘したこと、しかも language, とりわけ words の分析に立ち到ったことを評価する。が、一方、デテールが調和的に機能して、詩なり小説なりの「有機的統一」を生むといった、そこから派生した考え方に対しては、誘惑的ではあっても、実は調和しないデテールを置き去りにする考え方であるとして、かつては Miller 自身が傾倒していた Georges Poulet らの現象学的「意識の理論」をはっきり批判しにかかる。彼は、文学批評が、作品の「出発点」という形で、その作品の意図 (あるいは意識, テーマ) を前提に持ち出すとき、それに合致しない面は見過されがちになると考えて、作品の内部の異種混合性 (heterogeneity) を認知することの必要性を主張する。それは、作品の意図 (テーマと言い換え可能) ではなく、言語、とりわけワードやレトリックのレベルにまで、分析のレベルを切り換えることを表わしており、その点からだけ見ても、Miller (あるいは Deconstruction) の理論が、やはり、構造主義理論の分析レベルに通底するものであることを窺わせる。

次に、Iser の *The Act of Reading*<sup>(3)</sup> の論点はどのようなものであ

ったか。この書は、Iser が、以前、*The Implied Reader* (1974) で展開したいわゆる reader-response 理論を当然前提において書かれたものである。*The Implied Reader* では個々の作家と作品毎に分析されたものが、*The Act of Reading* では、さらに徹底して、author-text-reader の相互関係論として理論化されていると言ってよいだろう。Miller の *Fiction and Repetition* には、「作品の言葉やレトリックについて述べるほうが、読者やその反応について語るよりは、得られるものが多い」

The shift back from “consciousness” to “language” as the category to be investigated allows in principles a closer look at what is actually there on the page and at the transaction between reader and word from which meaning emerges. (...) I think more is gained by talking about the words of the work, its rhetorical texture, than by talking about the reader as such and his responses. (pp. 19-20)

として、暗に、reader-response criticism を牽制、もしくは揶揄した文章が見出されるが、後者には後者の、文学批評上独自の地平が存在すると思うのは筆者だけではあるまい。

*The Act of Reading* の序文で、Iser は、文学の意味と受容が、テキストだけのものでも読者だけのものでもなく、読者のプロセスの中で実現される潜在的意味をテキストは記述する（にすぎない）と述べる。

Effects and responses are properties neither of the text nor the reader; the text represents a potential effect that is realized in the reading process. (p. ix)

基本的に、文学をコミュニケーションの一つのフォルムと見なす考え方である。そして、まず、機能論的に見た文学テキストモデルの解明が行なわれ、テキストをレパトリーとストラテジーの二つの機能要素的側面から説明しようとする。次に、文学テキストが、一貫性を保とうとする間、読者はこのテキストのレパトリーとストラテジーという構図によって浮

かび上がる真理を意識下に統合しようとする、と考えられている。その基本になるのはイメージであり、言い換えれば、読者がイメージを構築する中で、テキストの意図するところが明らかになり、テキストのテーマが実現される。つまり、現象として見れば、読者がテキストの意味産出に加わり、かつ自分もそれによって修正を受ける立場あるいは役割を担うのである。だが Iser は、テキストと読者の間の相互作用の特性を、さらに次のように分析する。一般の社会的相互作用に見られる「対面状況」(face-to-face situation) 及び、対人関係でのパートナー同士の会話に存在する特定の「目的」、という二つの面が、テキストと読者の相互作用には欠如していると彼は考える。そこから不確定性(空白)が生じるが、この不確定性が実は、テキストと読者の読書過程でのコミュニケーション作用を引き起こす。つまり、文学テキスト(虚構・フィクション)は、世界とも読者とも完全に重なりあわないところにおいて、コミュニケーションの条件をつくり出しているのであり、この重なり合わない(不確定性の)度合いは、テキストそのものが内包するのではなく、むしろ読書中に生み出されるテキストと読者の結びつきかたに左右されるのである。

実際、この理論は、すでに明らかに、(かなり莫然とした議論ではあったが、) Iser が数年前にまとめて発表した評論集 *The Implied Reader* (1974) の序論で提出されていた<sup>(4)</sup>。彼がそこで用いた “the implied reader” という用語を今一度確認しておこう。彼は、読者の活発な参加が小説にとって基本であると述べた後で、この評論集の表題の “implied reader” という用語がそのことを要約していると語る。

This active participation is fundamental to the novel; the title of the present collection sums it up with the term ‘implied reader’. This term incorporates both the prestructuring of the potential meaning by the text, and the reader’s actualization of this potential through the reading process. (p. xii)

“implied reader”とは、テキストが前もって構成上持っている潜在的な意味を、読者が実際に現実のものにする作用と言える。だが、現実のものにするとはどういうことなのか、その辺をもう少し具体的に知る必要がある。

たとえば、narrator を通じて author は reader を刺激し、判断するよう促そうとするが、その際、読者自身の状況をふり返らせるような幾つかの手段が構じられる、と Iser は述べる。(The Act of Reading, 4 章. ‘strategies’) ただ、その際、author が reader をして、描かれた現実に対する批判的態度をとるよう導くのは確かだが、彼は reader に、提供された視点のうちの一つを選択するか、あるいは自分自身の視点を発展させるようにしむける。つまり、読者は、自分自身の立場の可動性を通じて、作品の意味を理解すると考えられる。Iser は、このような様々な視点の先取りと読者の先取りと読者の活性化という特徴を見事に備えた作品として、Thackeray の *Vanity Fair* を分析しているが、この特性を備えて読まれうる作品は、決して *Vanity Fair* に限るものではあるまい。

ただ、一つ留意すべき点は、読者によるテキストの意味産出への参加は、読者が自分の過去の体験によってテキストのブランクを埋めていくことでなされるのではなく、テキストの提供する様々な要素（レパトリーとストラテジーの両者を含めて）の並置・置換によって意味が得られるとされている点であろう。つまり、Iser のコミュニケーション・モデルは、テキストの様々な断片の、絶えざる弁証法的な再組織化の機構を指しているものであり、読者が自分の過去の経験に照し合わせながらテキストの中のオブジェクトとブランクを、自分の手で再操作する試みを指していると考えられよう。

それでは次に、Miller と Iser の批評の具体例として、両者が共に取り上げた Thackeray の *The History of Henry Esmond* の扱い方の相違を見ておこう。

まず、Miller による扱い。彼は前述した「反復」の機能が、*Henry Esmond* では、アイロニーと結びついていると考える。この作品は、アン女王の治世に活躍した退役軍人が、自分の過去をふり返る自叙伝の形をとっている。彼の物語る歴史は、典雅な古文調の体裁とは裏腹に、若かりし頃の欲望・憧憬と失意の流れに沿った自分史的色彩の濃いドラマである。彼は尊敬・崇拜・思慕、そして恋情の対象を、ひたすら第4代 *Castlewood* 子爵の家族に求め続けるのであるが、結局は、自分が最も尊敬されるに価する人物であることを発見し、ニューイングランドの植民地に落ちついて余生を送ることになる。Miller は、作品に登場する太陽・月・星のモチーフを中心とする反復を辿っていくことで、主人公 Henry の自画像を浮かび上げていくが、同時にまた、太陽と月という光と影のモチーフ自体が示す反復の二重性を暴き出していく。テキストのすべてにわたってこのダブルが見出されていき、authority に対する snobbery、つまり、人格者 Henry に対する俗物 Henry たる彼の二重人格性が暴かれていく。反復とアイロニーが手を取りあって、Henry の、ひいては自叙伝である作品の、意味構造の複層性を構築していくのであるが、結果的に読者は、テキストの意味決定不可能性に直面させられるというのが、Miller の批評の本筋であろう。

他方、Iser による *The History of Henry Esmond* のとり扱い。Iser は、*Henry Esmond* を、基本的にその自伝小説という形態がもつテクニクとテーマとの関連で扱えようとする。Iser 自身の言葉を使えば、ストラテジーとレパトリーの関連と言い換えられるだろう。彼は、伝統的な小説のヒーローが紛れもない確固としたアイデンティティを備えていたのに対し、*Henry Esmond* を19世紀の Goethe や Hegel に推し進められたいわゆる Self-culture の線上にあるものと考え、主観を何か失なわれてしまったものとしてでなく、今や真理でありえなくなった主観の歴史的概念に対する反証として、新たに自己と世界との関連性に関わる真理



を探ろうとしたと考えるのである。Henry の自伝という形式をとることにより、従来の歴史小説とは異なって (Lukács の歴史小説には抵触し、Scott の歴史小説の伝統からは逸脱する)、自己観察、自己洞察のプロセスを通じて、歴史のヒロイックで記念碑的側面が慎重に縮小され、主人公の歴史的な現実世界に対する反応が、彼が自己を知り、ひいては世界の真理を知る唯一の手掛かりとなる。

ここで Iser は、この作品の narrative technique として、視点の詳細な分析を試みる。自伝とは言っても、この作品の語りは、さまざまな視点のバリエーションによることに着目するのである。語りは、一人称によっても三人称によっても行なわれ、しかも三人称の中にも、Henry が自分を ① Mr. Esmond あるいは Colonel Esmond ② Harry あるいは Youth ③ ただ Esmond とだけ呼ぶとき、のニュアンスの相違、一人称の場合でも、単数 I と複数 we による価値づけの違いが存在するとし、さらに三人称でも一人称でもなく、バイブルや古典を援用した文学的メタファーも語りの視点の変型として各所に表れると Iser は列挙する。しかも主人公の Henry 自身が、たびたびこの “mode of writing” に言及し、自己判断・自己評価の正しさに対して敏感である。語りの視点のバリエーションに関する Iser のこの指摘は、この時代までの小説や、とりわけ Thackeray の作品には往々に見られた表現のルーズさをさし引いても、作品のストラテジーとレパートリーの関連性の点で、よりおもしろい議論と言えるだろう。また、おそらく読者には、Henry が自己啓示に到る間のこのような視点のバリエーションに直面して、色々な反応が生み出されるだろう。先述した、テキストの様々な断片の、絶えざる弁証法的再組織といった、Iser のコミュニケーション・モデルを再度ここで考えあわせると、*Henry Esmond* という作品がもつ 龐大な断片の寄せ集め及び視点のバリエーションという重構造が提供するコミュニケーション・モードは、また 龐大と言わねばならない。*The History of Henry Esmond* が、固くるしい

Hegel 流の自我の探求によってなく、読み替え、複数解釈を許容するパズルゲーム的解釈の楽しさによって、現代に甦ることも、このあたりの議論から可能になるのではないと思われる。

以上、二人の批評家による同一作品のとり扱いを見てきた。アプローチの方向には相当な隔りがある。しかし、結論的には、期せずしてある共通の認識が存在するように思われる。それは、いづれもが、作品に読み替え、複数解釈を許容する方向にあるということである。作品の「正しい意味」という概念が頓に存在しえなくなった以上、その方向は解釈の必然的成り行きとも言えるだろう。しかし、それ以前に、読者あるいは批評家が、作品の意味産出に参与するという図式自体が招いた結果とも考えられる。

いづれも、作品が固定した存在としてではなく、なにか可動的なものとして後世に甦る可能性を指摘する議論としては大いに期待される。ただ、言語の意味表示機能に寄せられる信頼が、きわめてドライに剝ぎ落とされ、テキストの重構造の再構築作用に熱心なあまり、諸々の言葉のニュアンスのぬくもりが置き去りにされるとき、作者と読者の乖離は甚だ増幅するおそれがあることに留意するのを忘れてはならないであろう。

#### 註

- (1) 『英米文学辞典』第3版（研究社、1985）、p. 1297 参照。
- (2) J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition* (Cambridge: Harvard University Press, 1982). 本書からの引用頁は本文中（ ）内に示す。
- (3) Wolfgang Iser, *The Act of Reading* (Baltimore, London: The Johns Hopkins University Press, 1978). 本書からの引用頁は本文中（ ）内に示す。
- (4) Wolfgang Iser, *The Implied Reader* (Baltimore, London: The Johns Hopkins University Press, 1974). 本書からの引用頁は本文中（ ）内に示す。

(1986年6月10日 受理)